

あとがき

I

私記風に

向井孝

1

いまからちょうど十年前、一九六四年一月二十四日早朝、小川さんは死んだ。

その十九日附近の路上で転倒して二十一日頃より病状悪化、それから数日後、まことにあったというまもない小川さんらしい美事を死につぶりだった。

棺に納められた小川さんの顔は、あおさめながらなお若々しく美しかった。

翌日、黒旗におおわれた柩は、名古屋地方の同志たちにかつがれて、丘の上の火葬場へと運ばれた。明るく晴れわたった冬空は、あくまで青く深く、とおくに光る知多の海から吹く烈しい疾風は、告別のために集ったほくらの衣服をはたはたと鳴らしつづけたのである。

その日、日本アナキスト連盟は、次のような弔辞を送った。

「……あなたがその誠実無比な生涯をかけて、日々の活動のうちに示された無償の愛、そしてあなた自身とついに一つのものであり、その顕現であったアナキズム！」

そのアナキズムと連なつて、私たちはあなたの友、あなたの後輩、あなたに導かれる生徒として、日本アナキスト連盟の組織のもとに活動をづけてきました。

おもえば戦後、連盟の結成発足とともに平民新聞名古屋支局をひらき、その変りない献身をもって、名古屋地方の運動の中心となり最大の推進力として、若い同志をあつめそだて、その思想と運動に生活のすべてをかけ、いのちのかぎりをそそぎつくしたあなた！

貧窮に屈することのない市井のすぐれた学者であり、魅力あふれる表現力をもった天性の詩人であり、さらに果敢な実践者であつたあなた！

あなたの存在は、私たちのアナキスト連盟が、ともすれば小教ゆえに陥入りがちな教條化硬直化を正す鏡であり、何にもましてアナキズムの未来の豊かさを証しする運動の導きでもありました……」

2

七〇年安保闘争の前後、ぼくは、たとえば六七年のベトナム反戦直接行動委の兵器工場（日特金屬）への攻撃にはじまつて、羽田から佐世保へとつゞく一連の事件のたびに、「小川さんがいま生きていたら、どう考え、どう動くだろうか」と、しばしば思ったものである。

生前の小川さんは、そのようなとき問題の焦点を明らかにし、ぼくらの問いのあいまいな部分をついて、うてはびくように応えてくれた。小川さんのデリケートな感受性は、ほんと直感的に、いつも状況の本質を正しく把握していた。そして現実をきわめて実証的に分解しながら詩人の予感が明日を見透す先見性として語られていた。

だがそれにして小川さんは、ぼくらにとって何でも問いかけることができる、誠実で頼もしい同志である——というよりは、もっと気易い心からの話し相手であつた。

小川さんの、あのせきこんでどもるような、早口でつつかけてくる熱っぽい議論のくせやと思うとまるで少年のように羞恥をうかべて、J・ジュネを讃嘆するときの腫さしの天真らんまんさはとても年令を感じさせぬものであつた。

また、その文章にあらわれている多彩で奔放な表現、柔軟で流露する発想と思想のオリジナリテイは、まさに青春のみがもついきいきした意欲にみなぎつていた。

そしていまおもえば、そのようにぼくたちを隔意なくひきつけた小川さんの天真さ、若々しさは、かかって小川さんのアナキズムへかけたシンセリティー別して、そのいつもかわらぬ情熱の初々しさが生みだした魅力にちがひなかった。

△小川正夫遺稿集Ⅴを出したいという話が出たのは、葬儀が終った夜、名古屋地協の集りであった。著作しらべと追悼記についての協力要請が各地同志へ送られ、それは幾分か進化したものの、具体化まで進まず、とうとう十年がたった。

たまたま昨春秋、ぼくが戦後のアナキズム文献類を整理したとき、Y君に小川さんの著作を差し出してもらって、その目録を、鬼頭さん、すみさん、小川潜君に送るということがあった。一方、名古屋では、編集の努力が根強くつづけられていて、原稿の清書が半分以上終了していた。そしてこんどはどうしても刊行まで漕ぎつけよう、ということになったのだった。（だがそれからでも一年余たった。この本が十週忌に間にあわぬのは、ひとえにぼくが受持った部分のおくれからである）

それはともかく、ぼくらがとりあえずあつめることができた小川さんの文章は、未完または草稿のままの二、三をもふくめて八七篇。

その執筆時期は、一九五〇年―小川さん五五才のときから、六四年―六九才で死去するまで、いわば晩年とも云うべき最後の十余年間に過ぎられている。

発表はいずれも日本アナキスト連盟の機関紙誌、ニュース、その関連印刷物。―ということでは、小川さんは、いわゆるインテリの物書きとしてこれらを書いたのではなく、運動の実跡者として、その折々の必要に応じて書いたということが云えるだろう。

もっとも、五五才から突然これだけのものを書きはじめた―とは考えられない。戦時中不敬罪で二年余入獄するといった大きな断絶があったとしても、何がしかのものが戦前にも書かれていたろう―ということから、昭和初期のアナ関係出版物にまで一応眼をのばして、それらしいものを搜したが、残念ながら発見出来なかった。（おそらく、もの書き的に書かなかったというような前記の事情もあった、まともだったものはないのかもしれない）

ともあれ、小川さんのもっとも円熟した思想をみるという点では、ここに集められた戦後のもののみでも、不十分なが達成されると思われる。（もっともぼく個人の思い出から云えば、ぼくが小川さんから学んだのはもっとばら日常ことに応じて、しゃべられるその話からであった。はじめて伊串さんと姫路へ訪ねてこられたとき、食事をはさんで七、八時間話しつつけて尚、あふれるように話題がつづくのにはぼくはただ呆然としたことを記憶している）

小川さんの思想については、名古屋地協議関紙へあかつき▽（六四年五月）追悼特集によせた山口英君の文章が、簡略にその特徴を語っている。

「：ぼくの考え方は、小川さんの考え方とは正反對でした。ぼくはアナキズムをひとつのテクニクとして、社会組織のひとつのフォルムとしてとらえようとした。いわばそれは、マルクス主義や、他のなんとか主義と同じ平面で、ただ優劣をきそうということでした。小川さんの考えでは、アナキズムは、マルクス主義とか他のものもろの社会思想とは、よってもって立つ次元を異にするもので、それゆえ比較するとか、優劣をきそうなんてことはどうてい考えられないーもって根源的な人間の考え方、生き方にかかわるもの、というよりは根源的な生き方そのものであったと思います。・・・

図式的ないい方をゆるして頂けるなら、人間の外部に比重をかけるものもろの社会思想と、人間の内部からの救いに一切をかける宗教思想という区分が、今ぼくの頭にうかんできます。アナキズムは、それら内外の比重のかかる地点の対立を止揚したーというよりはそれらの地点の非存在を明確につかんだところから出発する思想のように思えます。

小川さんのあのいささかのゆるぎもない、全くみごとなアナキズムへの確信は、そういう思想としてのアナキズムへの畏敬からくるものであらうと思います。」

これにいささか山口君が書き落したことをつけ加えれば、小川さんの思想は、同号高島洋君のー

「・・・その生涯をかけたアナキズムは、小川さんの生涯を貫いた青春の思想によって支えられ・・・」ということであり、それゆえに小川さんがアナキズムの原理原則を説くときも、決して十九世紀のそれを語ったのではなく、河本乾次さんが云うように「近代的、現代的アナキズム」としての、いま生まれたばかりのような△新鮮な思想の光茫▽を放つものであった。ということである。

この評論集を編集するために、ぼくは何とか小川さんの論文をよみかえした。そしてとくに、Ⅱ章の部分にまとめた諸論文をよむたびに、胸がいたむおもいがした。

小川さんがそれらのものを書いたとき、ぼくらは一体どのような受けとめ方をしただろう

か。当時は、ぼくを含めて多くの若い者たちは一多少の差異はありながら一山口君が述べたような政治主義的傾向と行動に眼をむけがちであった。

小川さんは、そのような若い者たちの、気まぐれで狭い視野から発する問題に、寛容に応える一方、しばしばぼくらに対して、重要な視点を示唆し、あるいは切実な提起をしているのである。

しかも、ぼくらは一方的に小川さんに馴れ親しみ、大きく依存しながら、うかつにも小川さんの提起を、正しくうけとめるという姿勢をもたなかった。自らの怠情と甘えに気付かずまともに答えるということをしなかった。そして小川さんは、なお大きくそれを宥しながらぼくらのうちにある肯定面と否定面を謙虚な語り口で説き、そのようなぼくらを一依然として運動の未来を托さねばならぬものとして一信頼しつつ、語りつづけたのである。

小川さんの文章に、一つの特徴ともいえるべく共通して流れている、その大きなオプティミズムとベシミズムは、まさにそのようなぼくらの在り方に対しての、小川さんの心情の反映としてみると、ぼくはいまさらながら自分を、悔恨のおもいで包まざるをえない。

6

小川さんの死後、日本のアナキズム運動は、六八年のアナキスト連盟の解散とともに、全国に数十数百のグループが生まれ七〇年安保闘争を前後とする時代の新しい状況下にさらに若く新しい世代を中心とする運動の集合離散が行われている。

そしてこの評論集が、どうしても出されねばならない理由のひとつには、小川さんが示唆し提起した問題が、なお現代的課題としてその運動状況のなかに存在しているということにある。

この発行企画が、はじめの八遺稿・追悼集Ⅴとしてでなく、八小川正夫評論集Ⅴになった理由は、云うまでもなく単に故人を追慕記念することだけでなく、ひろく未知の読者にもひろげてそのような運動のためにすこしでも役立たせたいということからにほかならない。

その観点から、編集にあたってはより一般的なものとするため、小川さんの諸論文から、Ⅰ 性とアナキズム。Ⅱ アナキズム運動のために。Ⅲ アナキズムの立場と視点。そして翻訳であるが小川さんの日頃の主張そのものを仮託したとも思える、死直前の絶筆をⅣとして、二五篇をえらんで各章に大別した。小川さんの文章はどのような短いものでも、珠玉の

ように光る一行がはめこまれている。その博聞多識とともに多岐にわたる分野への言及^はとにもいづれも捨てるに惜しいものであったが、編集の上で割愛せざるをえなかった。また書名はハ性とアナキズム^ハとしたが、とくに他意はない。

もともと小川さんの論文は、たとえば注文に応じて機関紙「クロハタ」に十回にわたって連載したハアナキズムの立場からの性問題^ハのようなものをのぞき、理論機関誌「アナキズム」や連盟ニュース等内部の発行物に掲載されたものが多く、紙面の関係上枚数を短く制限された、もっぱら仲間うちへの発言である。

それゆえ当時の運動や連盟の事情、年代、社会的事件等を念頭に入れて読まねば判らない省略や、説明の欠落が多分にある。それは各篇末尾に最少限のハ注記^ハで補ったが、なお不充分をまぬがれない。

しかし、末だ「戦後アナキズム運動史」がかかれていないままの現在、その一時期の運動と組織問題を思想的に照らしだしつつ、現在の状況と重ねあわせてうかびあがらせるものとして、それだけでもみのがしえない重要な意味をもつと云えるだろう。

ともあれ、十年の歳月の経過にもかかわらず、このハ小川正夫評論集^ハは、小川さんのこうした貴重な遺産を、現代アナキズム運動に伝えるものとして、若い仲間たちに読まれることを心から期待したい。

あとがき

II

すみ・ぜんいち

小川さんが亡くなったとき、みんなが思ったのは、遺稿集発刊のことでした。そして直ぐその準備に入ったのですが、思いとは別に、十年の^ハ月が過ぎてしまいました。

その間、伊串英治、加藤清八、日置守一、そして戸田正光と、小川さんの死を悼んだ人々が、その後を追うように去っていかれました。このやるせない悔いに似たものが、「今度出せなかったら駄目になるかもしれない」、そんな気持ちといっしょに、みんなの心の底にあったのではないのでしょうか。だから、予定よりもかなり遅れはしたものの、発刊までこぎつけられたのだ。こんな気がするのです。

さて、こういう仕事は初めての者ばかりなので、全く大変でした。原文を集めることから原稿用紙への写し取りなどと、小川さんと交わりのあった人は勿論のこと、一面識も無かつ

た若い人達の協力もあって、それこそ、みんなの力を寄せ合って一恐らく、そうでなくてはできないのでしょーうがー漸くできたのでした。特に向井さんには、始めから終りまでまるでおんぶしてしまったことになりー多忙々々な人なのにー何てお礼を云っていいかわかりません（そんなこと水臭いやないか、と云われるだろうが）。

（編集について）

初めは、できるだけ多く載せようー短い文章の中にも独得の味わいをもったものもあるものでーとしたのですが、整理しているうちにこのようになってしまいました。が、掲載されていないものは、年譜の中の目録を参考にしてお読みいただければと思います。

又、解り易くするために、一部表題を変えたり、字句の訂正をしましたので、この点ご了承下さい。

『弁証法的唯物論批判』（こちらで仮につけた題名です）は、原稿の初めの方が欠落していますので、残念ながら載せることができませんでした。

そして、私の心を強く打ったのは、作品が五十才を過ぎてから書かれたものだということでした。特に亡くなられる前年には次々と発表されており、潜君（小川さんの息子さん）の話によれば、『原始社会と神話』の翻訳は、お倒れになるほんの前に完成されたもので、その後ひどく疲れられたようです。実際、原稿の字も読みにくく、文章も直訳的でかたいようですが、それが却って、力をふりしぼって、といった感じで圧倒されました。

ともかく、どうやらこうやらこんな形のものにもまとまりました。もう一度ー初めての方もありましょーうがー小川さんの思想にふれていただければ幸いです。

小川五夫遺著集

1981年1月1日

小川五夫遺著集

小川五夫遺著集

小川五夫遺著集

